

「聞く技術」から構築する人と自然の物質代謝の里山・里海復興計画考
-2024 能登半島地震からの里山・里海集落復興を組み立てる-
A Study of Disaster Recovery Planning based on Metabolism between Human and Nature with Voice Literacy

市古太郎¹⁾
Taro ICHIKO

1) 東京都立大学 都市政策科学科, 教授, 博士(都市科学) (E-mail: ichiko-taro@tmu.ac.jp)
Tokyo Metropolitan University, Professor, PhD (Urban Science)

本報告では 2024 年能登半島地震からの伴走型調査活動の中で創発されつつある「聞く技術」について説明し、穴水町 K 集落での回復に向けた地域の営み観察と対話を通して、能登半島地震復興に関する論点を提示してみたい。

2024 年能登半島地震, 世界農業遺産, 輪島塗, 復興まちづくり, 災害ボランティア活動
2024NotoPeninsula Earthquake, GIAHS, Wajima-Nuri, Recovery Planning, Disaster Volunteer-Work

1. 現代復興への大きな変曲点 (!?)

自然・建築・まちづくりの融合デザインという本学術研究協議会テーマに向けて、特に自然との融合、「自然に根ざした解決策 (NbS)」に関連して、2024 年能登半島地震からの里山・里海集落の復興について、現地フィールドワークを元に報告したい。

以下、本報告では、輪島塗塗師の赤木明登さんとの対話から、復興まちづくり計画の方法論として創発段階の「聞く技術」を説明した上で、被災地での実践と里山・里海集落の復興の論点について、現時点では大変な稚拙さを承知で述べてみたい。

報告の基底として、筆者がこれまで従事してきた復興まちづくり支援型研究、すなわち 2011 年東日本大震災からの移転型集落再建に対する気仙沼での実践¹⁾、同じく 2011 年長野県北部地震(栄村)での地元 NPO との共同研究²⁾がある。加えて、関東大震災百年、帝都復興事業に対する都市計画学としての振り返り「特集：近代復興から現代復興へ」の編集主査を務めた³⁾ことも今回の報告につながっている。

2. 「聞く技術」とは

「聞く技術」という方法論は、能登半島地震後の経緯の中で、輪島塗り塗師の赤木明登さん⁴⁾との対話の中で教えていただいた。赤木さんは、「とおの一号」という在来品種の米栽培から日本酒づくりに取組む岩手県遠野市の佐々木要太郎さんの醸造蔵とオーベルジュ滞在を通して、次のように表現する。

有史以来、人類は自然を対象化して加工することによって、文化を築き上げてきた。その方法である技術が、何処かで変形し歪んでしまっているのではないかと。いや、そもそも技術というものには、二つの側面があるのではないだろうか。一つは、

お米に「どう育ちたいのか」と聞くような技術。もう一つは、お米に「お前たちはこう育ちなさい」と命じるような技術である。もともと人は「聞く技術」でもって、ものをつくりつつできたのではないかと。それがいつのまにか、「命じる技術」によるものづくりに取って代わってしまい、そっちが主流になってしまった。技術が自然に寄り添うものではなくて、自然を支配するものになってしまったのだ。

赤木明登, 二十一世紀民藝, p.192

能登半島地震復興祈念トーク⁵⁾に向けた対談準備で、この赤木さんの文章に出会った際、鳥肌が立った。能登半島地震からの復興にこそ、この「聞く(聴く)技術」が求められているのではないかと。

すぐに思い浮んだのは、1923 年関東大震災からの帝都復興事業の「聞く技術」の対極にある「命じる技術」としての側面である⁶⁾。発災翌年の 1924 年、内務省復興局は「区画整理早わかり」という全 34 ページ、カラー挿絵ありのパンフレットを作成し、市民にこう呼びかけた。

都市計画法に依る所の土地区画整理を断行して、蚯蚓道路と寄木細工の敷地を撤廃して秩序整然たる道路と宅地をつくる。

表紙挿絵では、夫婦と小学生の子の家族が「焼けない前の東京」と「区画整理後」の市街地図面を眺めながら、児童に「僕達ノ街ハコンナタンポミタイチャイヤダ」と発言させている。本文には、路地、路地裏、木戸、といった江戸から明治にかけて継承されていたであろう「生活景資源」についての言及は、ない。

一方「聞く技術」に関連して、都市計画学との関係で重なるのが、石田頼房の論考「土地利用の思想と計画の理念」である。石田は、宮澤賢治「注文の多い料理店」に収められている「狼森の策森、盗森」を引用し、

岩木山の麓に広がる森林高原地域へ入っていく農耕入植者たちの森への問いかけ、

「ここへ畑起こしてもいいかあ」

に対し、

「いいぞお」「ようし」

と森が一斉にこたえ、それを聞き取って入植を始める物語を元に、次のように述べた。

都市的土地利用の可能性も、その土地に本来的に備わっているものではなく、外から与えられているものであるということを確認することが、都市的土地利用の思想であり、土地利用計画の基本なのである。

石田頼房, p. 85

石田は、都市における土地の利用可能性を「外から与えられているものであることを明確に意識」することが都市における基本的な計画の営みであると論じ、明確に意識するためのオマージュとして、自然に問いかけ「聞き取る」行為を提示し、さらに「建築の自由の範囲を超えて土地を利用できる権利は、計画に基づいて付与されるものであり『開発権』と呼ぶことが出来るかもしれない」と指摘した。これは「聞く技術」としての「計画」の一つのあり方と言えるのではないだろうか。

ところでもう一点だけ、誤解のないように付け加えておきたい。それは「聞く技術」=「聞くこと」そのものの技術のみを指すのではないという点である。赤木さんも「聞く技術」を工藝における「他力」という視点から考察し、輪島塗師として「一見なんの関係性もなさそうにバラバラにあるような事象を繋ぎ合わせる」こと、「必ず一本の線を選び取らなければいけない」仕事であることとも関連づけて述べている。つまり、データが大量に取扱いでき、深層学習できればよいデザインができるという話ではなく、データを活かすことは前提だが、そこから選び取る力によって、創造が生まれるという考え方である。

3. 能登での実践の中間報告

それでは、能登で何を「聞き」表現していくのか。本稿では、方法論としても安定し、多くの効果が期待できる被災地支援活動である「サロン活動」と穴水町内浦に広がる里海集落でのフィールドワークを元に報告したい。

(1) 被災地サロン活動

去年(2024年)の建築学会大会 都市計画部門研究協議会にて⁷⁾、被災地サロン活動は阪神・淡路大震災の「ふれあい喫茶」を嚆矢とし、災時だけでなく平時においても、かつ建築学においても取り扱われているテーマであることをレビューした上で、2024年能登半島地震における東京都-東京ボランティア・市民活動センター(TVAC)-災害協働サポート東京(CS 東京)の三者によるサロン・ボランティア活動を報告し、被災地サロン活動において、復興

まちづくり側からの協働と貢献が考えられること、参与観察調査から「被災地サロンは、その集落に身を置きつつ、日常の暮らしについて話しを聞く場であり、『暮らしと風景』を同じ目線で感じられる場」であること、これはまた

被災住民を対象に、復興計画策定プロセスに位置づけられ、反映するための会議体は、復興主体形成という点から、これまでも、また能登半島地震被災地の市町でも設置・開催されている。そのような場に平行して、くらしや近隣関係性の回復に資することを目的に開催されている被災地サロン活動、そこでの参加者のつぶやきとおしゃべりにおいても、復興まちづくりの専門家として受け止め、専門的処方提案に結びつけていくべき内実を含んでいるのではないだろうか。

市古太郎, 2024, p. 45

と報告した。東京都のプログラムはその後、2024年10月と2025年2月の2回、能登半島地震でサロン活動を受け入れてくださった地域リーダーを東京にお呼びして、報告会を開催した。また「交流プログラム」として2025年度もボランティア活動が継続している。なお東京都のプログラムはあくまで一例であり、全国各地で社会福祉協議会や民間支援活動団体が中心となって、サロン・ボランティア活動が展開されたことは付言しておきたい。

(2) 穴水町里海集落でのフィールドワークから

穴水町内浦に面するK集落は、人口307人、138世帯(2020年国勢調査)、2000年からの20年間で人口減少率40%を上回っている。公民館、郵便局、駐在所といった公共施設が立地する(震災後に郵便局は未再開)。

震災被害として、K集落としての人的犠牲者は本稿執筆現時点では未公表となっている。住家被害については、揺れによる被害に加えて、海岸護岸の不同沈下と海岸線際土地での液状化・海水流入の影響が生じている。なお穴水町としては人的犠牲者38名(うち震災関連死18名)、全壊496棟(全壊率12.1%)、大規模半壊+半壊で1,436棟(34.9%)となっている。また2025/6/30時点で穴水町内の災害公営住宅整備予定地区6地区のうち、唯一「木造平屋」10戸の建設が予定されている(石川県資料)。

K集落でのフィールドワークはこれまでに2024年7月、9月、2025年3月、7月の四回実施した。1回目と4回目はK集落出身者と現地在住の30-40代のメンバーが主催するサロン活動である「復興カフェ」への参与観察調査を、また2回目と3回目は区長さんと公民館長さんに話しをお聞きし、合わせて各回とも各時点での集落の様子を野外観察し、畑や屋外で仕事をされていた住民の方に話しをお聞きした。

フィールドワークを通して、以下のような「里海集落のくらし」が浮かびあがってきた。

- ・(進学で地元を離れ、外で働いてから家族で集落に戻ってきた女性)「K 集落には海も山もある。土地に根ざした生活ができる」。
- ・(海際近くに自宅のあるご夫婦)「仕事から帰ってきてから、舟を出して近くの沖合で魚釣りに繰り出す。逆に家から里海が眺められ、集落の人たちが舟で海に向かう様子を見るのも好きな風景」(4 回目の 2025/7 月調査では朝採り「さざえ」を調理してサロンに供されていた)。また何軒か家を見せていただくと室内から里海へ、もしくは水田や里山へ「抜け」の眺めのある家のつくりと街並みであることに気づく。
- ・(公民館長さん)「震災前の時点で、集落営農組織を立ち上げて活動しているが、思ったよりも応募者がいて、移住可能性は十分にあると感じた」。
- ・2008 年に K 小学校が廃校となったが、避難所として建物維持がなされ、大学実習で宿泊施設として活用していた時期もある。また給食調理室を活用して「かあちゃん食堂」を運営していた。高齢者を中心に、地元食材を使ってお弁当を配食する。また事前予約制で訪問客にも提供していた。
- ・毎回、それぞれ自分の畑を手入れする女性たちに出会う。早朝のフィールドワークで、自宅からポリタンクを荷台に載せて水を運ぶ女性に「精が出ますね」と声をかけると「金沢に避難している近所の友人の畑を放っておけなくて」と回答された。
- ・K 集落出身で現在は金沢に暮らす、サロン主催メンバーから「祭りを子ども達に経験させたい」と次の活動への意欲が語られた。

4. 震災による人と自然の物質代謝の亀裂 (Metabolic Lift) を回復すること

前節での「里海集落の暮らし」、実は今回策定された市町の震災復興計画においても中心的なコンセプトとして位置付けられている。図 1 は能登町震災復興計画 (2025/2 月) で提起された里山・里海の「暮らしの循環社会」である。そこには次のような説明がある。



図 1 暮らしの循環社会(能登町震災復興計画)

能登町では、「里山里海」がもたらす豊かな恵みを起源に、歴史の中で紡がれた「暮らし」「生業」「祭り」につながる「暮らしの循環」が維持されてきました。

地震と豪雨による被災で弱くなってしまったこの循環を、復興を通して修復し、再構築していくことが、地域の人々の幸せを取り戻すことにつながります。

この「暮らしの循環社会」という能登町の震災復興計画のコンセプトは、震災前の 2011 年に当初認定された「世界農業遺産」における「能登地域の農林水産業システム」とも重なる (図 2, 世界農業遺産保全計画第 3 期 2021/3 月)。



図 2 能登地域の農林水産業システム(能登地域 GIAHS 推進協議会)

ここでは、里山/米づくり/文化信仰/里海の 4 つの農林水産業システムに分けられ、「里山の保全が豊かな里海を作り出したり、カキ殻をワイン用ブドウ畑の肥料にしたり、揚げ浜式製塩で間伐材を使用する」といった例から、「相互に関係しながら、地域全体として大きなシステムを形成」しているとする。そして、

「能登の里山里海」の保全を通して資源管理と活用につなげること、豊かで持続可能な能登地域を目指す

と当計画は宣言する。これは、地球環境に対するエコロジーのとらえ方そのものであり³⁾、能登半島地震からの復興は、気候危機時代における最先端の復興モデルにもなり得るのではないかと。

大きな地震によって、里山での米づくり・畑づくりを通した物質代謝に亀裂が生じ (Metabolic Lift)、また里海集落での養殖漁業や岸辺護岸の被害により海との関係が壊されてしまった。能登半島地震からの復興とは、発災前に営まれていた人と自然との交互作用から生成される「豊かさ」を再び回復していく営みなのではないか。そしてその豊かさとは、単に貨幣によって交換される商品の価値だけではなく、地域の人びとによって維持されてきた里山・里海の風景を見れば感じるように、物質代謝そのものがもたらす「豊かさ」であり、人が耕し、大地が

恵みをもたらしてくれる、次の年にまた耕す、その繰り返して形成されてきたように思われる。そして「人びとと自然の物質代謝」における「人びと」には、常住者だけでなく、都会で暮らす出身者や、集落外の親戚、友人知人、そして発災を契機とした被災地外の「わたし」も含むもの、と考えられるのではないか。

5. 「豊かさ」の回復に向けて

本報告では 2024 年能登半島地震からの伴走型調査活動の中で創発されつつある「聞く技術」について説明し、K 集落での発災後の回復に向けた地域の営み観察と対話を通して、「能登半島地震からの復興とは、里山・里海集落を背景に、震災に伴う人と自然の物質代謝の亀裂を埋め、その『豊かさ』を回復していくことにあるのではないか」と仮説を述べさせていただいた。全くの中間報告段階ではあるが、引き続き伴走型調査を継続し「自然に根ざした解決策 (Nbs)」という視点からの考察も深めていきたい。

そういえば、先の 7 月調査では、K 集落で栗農園を営む三代目が「うちの栗は、薄皮付き揚げ栗が一番美味しい」と、声をかけてくれた。9 月にはまた「聞く」フィールドワークを進めたい。

謝辞

本研究は、公益財団法人 東京都都市づくり公社と東京都立大学との共同研究「2024 年能登半島地震の復興実態調査と東京の事前復興計画への考察と拡張」(2024 年度～2026 年度)の研究結果の一部である。また穴水町の集落調査においては、村上勝氏(前石川県危機管理監)に貴重なご助言をいただきました。フィールドワークは東京都立大学 都市防災・災害復興研究室としての学術調査であり、大変献身的に従事いただいた学生各位に感謝申し上げます。

注釈

(1)赤木明登氏は 1962 年岡山県生まれ、中央大学文学部哲学科卒業、編集者を経て 1988 年に輪島へ。輪島塗の下地職人 岡本進のもとで修行。1994 年に独立。輪島塗の塗師。石川県立輪島漆芸美術館「メイドインワジマ」(2021) など、国内外の展覧会に出展。2007 年能登半島地震も経験。2023 年、輪島市門前町内保に日本料理オーベルジュ「茶寮杣徑(そまみち)」を開店。漆藝家としての活動のみならず執筆活動も継続的に行っている。主な著書として「二十一世紀民藝」(2020)、「工藝と何か」(2024/3 月)。また出版社「拙考」を張逸雯さんと設立。

2024 年能登半島地震の影響で工房が被災し、一時、金沢市内で仮工房を立ち上げ、再び輪島のアトリエを回復させ、さらに木地師を中心とした分業仲間の生業再建にも尽力されている。

(2)2024/6/27 に東京都立大学教員有志で、赤木明登さん、赤木さんのご友人で服飾デザイナーの堀畑裕之さん、関口真希子さんをお呼びして能登半島地震復興祈念トークイベント／『工藝と

は何か』出版記念イベントとして「能登という器の破壊と再生-その工藝的なあり方について-」を東京都立大学 1 号館 120 教室 (350 人教室)で開催した。

(3) 関連で Sustainability および Resilience も踏まえた都市計画における Regenerative の可能性についての市古⁸⁾、また Metabolic Lift については、斎藤⁹⁾ および Foster¹⁰⁾ を参照。

参考引用文献

- 1) 市古太郎 (2017) 寄りそうプランニング 気仙沼杉の下集落での住まい再建支援活動から、復興(19 号) Vol.8, No.1, pp.28-35, 2017/7 月
- 2) 市古太郎 (2019) 2011 年長野県北部地震、農山村集落の住家再建と空間遷移実態—長野県栄村 2 集落での発災後 5 年間の集落再建特性—、日本災害復興学会論文集、第 13 号, pp.1-10
- 3) 日本都市計画学会 (2023) 「特集：関東大震災百年：近代復興から現代復興へ」、都市計画学会誌 Vol.72,363 号
- 4) 赤木明登 (2018) 二十一世紀民藝, 美術出版社
- 5) 市古太郎 (2023) 帝都復興：近代都市への復興提案と深まった都市計画への関心, 都市計画学会誌 Vol.72,363 号, p.2
- 6) 石田頼房 (1988) 土地利用の思想と計画の理念-都市の土地問題解決の基本的方向-, 文化評論 324 号, pp.78-97
- 7) 市古太郎 (2024) 被災地サロン活動と復興まちづくりの連携の可能性-能登半島地震での活動参加も踏まえて-, 建築学会都市計画部門研究協議会「能登半島地震復興」, pp.42-45
- 8) 市古太郎 (2025) Disaster Research と Regenerative, 都市計画 372 号, pp.34-37
- 9) 斎藤幸平 (2023) マルクス解体 プロメテウスの夢とその先, 講談社
- 10) John Bellamy Foster (2024) The Dialectics of Ecology: Socialism and Nature, Monthly Review Press